第 3 回　毎日エクステンション･プログラム

「北京大学･サマーキャンパス 2010」 重点遺跡レポート

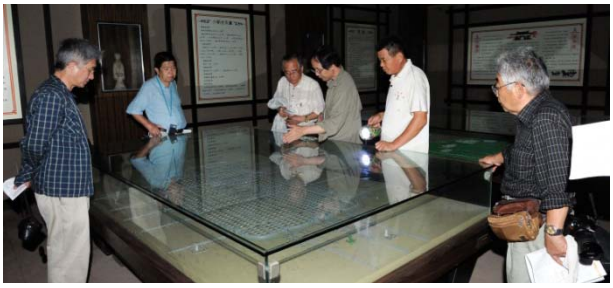
Ⅰ．古代中国の城壁・都市遺跡

「燕下都遺跡」【戦国時代・河北省保定市易県】

「燕下都遺跡」は保定市易県県城の東南、北易水と中易水の間に位置しており、戦国七雄の一つ「燕」（前 323～前 222・秦に滅ぼされる）が南方の拠点として、紀元前 4 世紀に建設した副都の一つで、東西約 8 キロメートル、南北約 4 キロメートルの長方形で、中央を運糧河の古い河道が南北に横断し、東岸沿いには隔壁が連なり、東西両城に分かれています。古代中国の城壁・都市遺跡としては大型の部類に属しています。「燕」は当初、現在の北京の地に都を置いて、遼西、遼東など東北地方で大きく発展しましたが、その後、山東半島の斉の国に敗れて弱体化しました。しかし、昭王の時代に再び盛んになると斉を撃破し、合従連盟の盟主になりました。昭王は強大な国力を背景に、広大な国都を建設、それが燕の下都です。

1930 年から一部の城壁と宮殿跡で、数次の調査が行われ、膨大な文物が発掘されています。「燕下都遺跡」としては、老姆台、望景台、武陽台の宮殿の基台遺阯が代表的です。中心部の南西部、燕の太子丹が住んでいたというところには、燕子塔と黄金台があり、その隣には城壁か土塁跡、更に西南へ進むと比較的保存状態の良い、見事な城壁跡が残っています。楼台に登ると、そのスケールの大きさと版築の強固さには驚かされます。

「魏・鄴城遺跡」【三国魏・河北省邯鄲市臨漳県】



鄴(ぎょう)は中国の歴史的地名で、後趙、冉魏(ぜんぎ)、前燕、東魏、北斉の各王朝の都でした。大部分は現在の河北省邯鄲市臨漳県にあり、河南省安陽市にまたがっています。鄴城には七つの城門があり、そのうち鳳陽門・中陽門・広陽門の三つは南面にあり、真南に位置する中陽門は別名を章門とも言い、北門は玄武門と言いました。

春秋時代、斉の桓公が城塞都市を建設したのが始まりとされています。戦国時代には魏に属し、『史記』で知られる西門豹が治め、灌漑の大事業を行い、大いに栄えました。後漢末期から軍事的に重要となり、群雄の一人・袁紹の本拠地でしたが、204 年（建安 9 年）に曹操が侵攻して拠点の一つとし、「銅雀台」などの壮麗な宮殿を造営しました。これ以降、魏の主要都市として発展し、南北朝時代には国都になりました。北魏から分裂した東魏を建国させた高歓は鄴を都に定め、540 年（興和 2 年）頃に新しい宮殿が完成しました。高歓の一族が建国した北斉でも引き続き、都となりました。北斉が北周に滅ぼされたあと、580 年（大象 2 年）には尉遅迥が帝位を簒奪する勢いの楊堅に反抗して挙兵、鄴に拠って抗戦しましたが敗北し、その後、城は焼き払われてしまいました。

「殷　墟」【殷・河南省安陽市】

殷墟は、河南省安陽市北西部のエン河の両岸に位置しており、商代後期（紀元前 1300 年～同 1046 年）の都城所在地で、当時の政治、経済、軍事、文化の中心でした。紀元前 14 世紀の末期に商王の盤庚がここに遷都して以来、商の紂王の時代に国が滅びるまで、8 世 12 人の王を経て 273 年間続きました。商王朝が周王朝によって滅ぼされた後、都城は荒れ果ててしまいました。この地はもともと「北蒙」という地名でしたが、又の名を「殷」というため、後世の人によって「殷墟」と名付けられました。1899 年、清の翰林（皇帝の秘書官）であった王懿栄は、服用している漢方薬の「竜骨」に青銅器の銘文とよく似た記号を発見。偶然に発見されたこの手がかりによって見つかったのが「竜骨」の産地である河南省安陽の小屯村（現在の殷墟所在地）です。考古学者はこの発掘から、敷地面積 24 平方キロメートルに及ぶ殷墟が配置のきちんと整った厳密な構造の都城遺跡であり、高度に発達した奴隷制社会の縮図であったことを裏付けました。ここには壮大な規模の宮殿や宗廟もあれば、庶民の居住区や奴隷の居住区もあり、銅器鋳造、骨器、陶器などを製造する手工業の工房もありました。ここ百年あまりの間に、殷墟からは 16 万枚以上の甲骨片が発掘されました。殷墟の王陵区は、東西の長さ約 450 メートル、南北の幅約 250 メートル、総面積 11 万平方メートルに及びます。ここでは、十三の王陵の大型陵墓及び 2000 余りの殉葬坑と祭祀坑が発掘されています。この区域で出土した最も重要なものに、1939 年にM260 号墓から出土した「司母戊鼎」があります。この長さ 1.1 メートル、幅 0.78 メートル、高さ 1.33 メートル、重さ 875 キログラムの大きな鼎は、殷墟から出土した青銅器の中でも逸品であり、中国で出土した最大の青銅器でもあり、中国古代の青銅器を代表するものです。

≪参考≫**「殷墟」**：真偽は不明であるが、1899 年に金石学者であった王懿栄（1845 年-1900 年）は、北京市内の漢方薬店で購入した龍骨（漢方薬の一種である骨）に金文（古代の金属器や石刻に刻まれた漢字）に類似した古文字を発見、これを解読すべく龍骨を大量に購入したと伝えられる。1900 年、義和団事変に伴う八ヶ国軍の北京侵入の際に王懿栄は自殺、収集した龍甲は小説家である劉鶚に譲渡され、その友人である金石学者羅振玉により龍甲は河南省北部の小屯村より出土したものであることが判明した。羅振玉は甲骨文字の解読を進め、この村は伝説上の存在と考えられていた殷王朝の遺構ではないかと推察した。その後王国維の研究により、ここが、盤庚が遷都した後の殷都である説が唱えられた。

殷朝遺構の調査のため、1928 年から甲骨の発掘調査が行われることになった。中央研究院は考古学者に

よる発掘隊を組織、日中戦争で中断する 1937 年まで 15 回にわたる発掘作業を行い、甲骨だけでなく青銅器などの金属器や墳墓などの遺跡も発見された。1950 年に発掘は再開され、1986 年までの間に 15 万件の甲骨が発掘されている。（注：『フリー百科事典・ウィキペディア』より引用）

「鄭州商城」【殷・河南省鄭州市】

鄭州市では、1950 年代に二里岡文化の遺跡が発見されました。二里岡文化は紀元前 1600 年ごろから始まることが科学的に判明しており、「偃師商城」と同時代の商代初期のものと言えます。その二里岡遺跡から、1970 年に巨大な城壁と宮殿の址が発見されました。それが「鄭州商城」です。鄭州商城は、現在の鄭州市街に位置しており、商王朝中期の都とされる都城遺跡で、南城壁・東城壁が約 1700 メートル、西城壁が約 1870 メートル、北城壁が約 1690 メートル、全周約 7 キロの版築で造られた大型の城壁を有しています。城壁内の北東部には建築基址群があり、その一帯が宮殿区であったと推測されています。城壁の周囲には青銅器製作址、土器製作址、骨器製作址など工房址のほか、墓葬区や青銅器を埋めた窖蔵が点在しています。大型の城壁を骨格として区画された鄭州商城は、まさに古代中国における都市の成立を物語っています。

≪参考≫**二里岡文化**（にりこうぶんか、紀元前 1600 年頃–紀元前 1400 年頃）は、中国の黄河中流から下流を中心に栄えた青銅器時代の文化。河南省鄭州市で 1951 年に発見された二里岡遺跡からその名をとっている。中国の考古学者は、鄭州付近を商（殷）王朝の初期の中心地と考えており、二里岡文化を商王朝の初期段階ととらえている。二里岡遺跡は周囲約 7km の城壁に囲まれた都城で、城壁の外に骨器や陶器を作る大きな工房群が位置していた。工房の中には、二つの青銅器工房も含まれている。二里岡文化は青銅器を大々的に使用する中国最初の文化であり、その初期には急速に勢力を拡大して長江流域にまで至り、湖北省黄陂県（現在の武漢市黄陂区）の盤龍城遺跡（長江流域で発見されている唯一の商代の都市遺跡）からは多くの青銅器が出土している。二里岡のある鄭州付近は銅の出土が少なく、盤龍城は銅資源を確保するための前哨であったと考えられる。これを絶頂として、以後二里岡文化は徐々に衰退していった。二里岡文化は先行する二里頭文化に影響を受けており、その青銅器は二里頭文化の様式や製造法を受け継いでいる。二里岡文化期には二里頭文化の時期よりも青銅器の様式は均一になり洗練され、青銅器の使用が広まった。（注：『フリー百科事典・ウィキペディア』より引用）

「二里頭遺跡」【夏（？）・河南省偃師市】

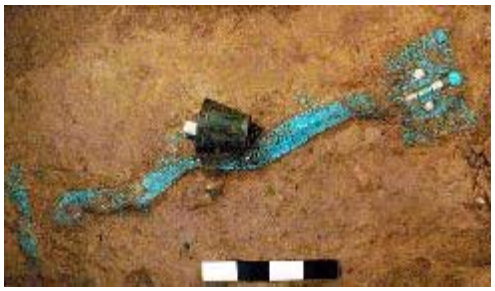
「二里頭遺跡」は、洛陽市の東郊外、偃師市の西部にあり、伊水と溶水の間に位置する新石器時代末期から青銅器時代にかけての古代都市・宮殿遺跡です。1959 年に発見されて以来、発掘や研究が進められており、1960 年には規模の大きな宮殿の基壇が発見され、中国初期王朝時代に属する最古の宮殿建築とされています。紀元前 1800 年から紀元前 1500 年頃の遺跡と見られ、中国の歴史上の夏・殷の時期に相当することからため、中国ではこの遺跡は「夏王朝」の都の一つと考えられています。しかし、歴史上の夏王朝の人名を示す文字資料は出土していません。

これまでに発掘された「二里頭遺跡」は四期に分けられています。一期および二期からは石器や陶器を作る工房が発見され、その基調は農村文化です。三期と四期からは青銅器工房と宮殿が発見されました。宮殿の遺跡は 2 つあり、一号宮殿址は南北 100 メートル、東西 108 メートルの方形の基壇の上に建てられ周囲には塀などが発見されました。そのすぐ近くにある二号宮殿址は東西 58 メートル、南北 73 メートルの基壇が発見され、その北に大きな墳墓があるため、祭祀のための施設とも考えられています。

中国の考古学界には、「二里頭遺跡」がどの王朝の遺跡であったかに関しては様々な推論があります。ひとつは一期から四期までの時期から、夏朝の文物が出土していると見て、これを夏王朝の都とみる説であり、また一期と二期からは夏朝の文物が、三期と四期からは殷の文物が出土しているとして、大きな宮殿は殷の初期の都城であると見る説です。

≪参考データ≫**■青き竜のつえ出土　3700 年前、夏王朝（？）遺跡から　―**

二里頭遺跡から、トルコ石製　（朝日新聞・2005 年 6 月 14 日）



中国の伝説上、最古の王朝「夏」の都城と推測されている河南省偃師市の「二里頭遺跡」で、多数の青いトルコ石で竜をかたどった、つえが見つかった。3700 年以上前とみられる貴族の墓に副葬されていた。中国で竜は権力の象徴とされる。殷（いん）（前 1600 年～同 1100 年ごろ）に先立つ王朝の実在を裏付けるとの見方が中国の研究者の間で強まっている。調査している中国社会科学院考古研究所によると、02 年春、墓の中で骨の上に重なっていたトルコ石の副葬品を発見し、現場から土ごと切り出し北京の研究所に運んだ。慎重に調査を進め、04 年秋からようやく全体像が浮かび上がってきたという。つえは長さ約 70 センチ。１個 0.9～0.2 センチのトルコ石を 2000 個余りあしらい、竜の形にしていた。木か竹と見られるつえ本体は腐って消失、石だけが残った。竜の頭の部分は縦約 11 センチ、横約 15 センチにわたり、白い玉の目玉二つと、トルコ石と玉でつくられた鼻がある。

遺跡からは、これまでに宮殿や街路、城壁などの大規模な都市跡や祭礼に用いる青銅器なども出土しており、夏王朝の都の可能性があるとみられている。同研究所研究員で、二里頭チームの許宏（シュイ・ホン）隊長は「今回これほど精巧なつえが貴族の墓から出土したことに大きな意味がある。竜は中国で特別な存在。二里頭に強大な権力の中心があり、王朝もあったとみられる。文字が発見されておらず、直接の証拠はないが、夏王朝が存在した可能性は高い」と話している。

Ⅱ．華北の陶磁器遺跡

「定窯遺跡」【宋金・河北省保定市曲陽県】

「定窯」は宋代の５大名窯（鈞窯、汝窯、官窯、定窯、哥窯）の一つで、古代中国の白磁を代表する名窯でもあり、古代中国の磁器生産に深遠な影響を与えました。史料によりますと、定窯で磁器の生産が始まったのは唐代で、宋代に栄え、元代に衰退しましたが、宋代の曲陽が定州に属していたことから、定窯と呼ばれるようになりました。周辺一帯が石炭生産地だったため、燃料は薪から石炭へと変化したため、白磁の色は黄みがかった発色となりました。特徴としては、「伏焼」という焼成方法、「涙痕」という釉の流れと溜まり、片切彫の劃花技法、鋭い印花文様、牙白色の釉調などがあげられ、白磁の優秀品を焼造していることで広く知られています。技法としては、覆輪、白磁、黒磁・柿釉磁、褐釉陶・緑釉陶、金箔貼付文様・錆花文様・掻落文様、白磁金彩などあげられ、銘には、役所の刻銘（「官」「新官」「尚食局」「尚薬局」「五王府」など）や宮殿名称の刻銘（「奉華」「鳳華」「滋福」「聚秀」「禁苑」「徳寿」など）があり、宮廷文化とのかかわりが強かったことを伺わせています。

≪参考≫**■金代定窯の窯炉遺跡、河北省曲陽県で発見**（中国通信・2009 年 12 月 22 日）

石家荘１７日発新華社電によると、河北省曲陽県にある定窯遺跡の考古発掘（期間３カ月）を行っている河北省文物研究所と北京大学考古文博学院の合同考古発掘調査隊が、これまでに発見されたものとしては保存状態が最も良い金代定窯の窯炉遺跡を発見した。「尚薬局」や「尚食局」などの文字の入った磁片も発見されている。定窯は宋代の五大官窯の一つで、白磁を生産していた古代中国の代表的な窯である。定窯遺跡は河北省曲陽県霊山鎮澗磁村から燕川村一帯にあり、面積は 10 平方キロ余り。国家文物局の許可を得た河北省文物研究所と北京大学考古文博学院の合同考古発掘調査隊は定窯遺跡に対する３回目の考古発掘を行った。発掘面積は 800 平方メートルで、今回の発掘の重点は澗磁村と北鎮村。合同発掘調査隊の責任者黄信氏によると、調査隊は北鎮村で、これまでに発見されたものとしては保存状態が最も良い金代定窯の窯炉遺跡を発見した。窯炉の全長さは 10 メートル近くで、全体が青磚でつくられている。

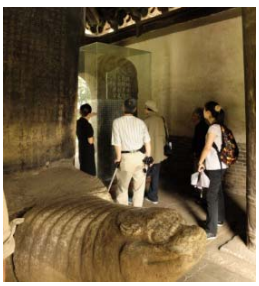
定窯遺跡で発見された「尚食局」という文字のある残碗が考古専門家の注目を集めた。専門家によると、「尚食局」の文字の入った磁器は北宋末期につくられた皇室用の磁器。「尚薬局」や「東宮」などの文字のある磁器の破片も見つかっている。最も精美な器物を生産していた北宋早期の定窯のあった場所と文化層が発見されたことを示している。

「磁州窯遺跡」【宋元・河北省邯鄲市磁県】

磁州窯は「南有景徳、北有彭城」と並び称される、江西省・景徳鎮窯とともに河北省磁県彭城を中心とした中国最大の窯場の一つで、元、明、清代の窯の跡があり、ここから大量の陶器が発掘されたことから、全国重点文物保護単位に指定されました。磁州窯系の窯場は、河北、河南、山西、山東省にまたがる広大なもので、宋元より現代に至るまで多くの生産量があり、化粧掛けによる多様な技法と長い伝統を誇る窯として知られています。磁州窯と言えば、生地や全面に白化粧した上に黒顔料を塗り、文様を箆彫りにした後に周囲を掻き落とす白地黒掻き落とし技法が有名ですが、その他にも白掻き落とし、白地鉄絵等の単色のものから、緑釉や赤絵まで多岐にわたっています。画題としては牡丹唐草のバリエーションが豊富で、鳥や動物、魚なども多く描かれています。そのどれもが奔放で力強く、いかにも民窯の魅力に溢れています。

Ⅲ. 道教・仏教遺跡

「北岳廟」【南北朝・河北省保定市曲陽県】



「北岳廟」は曲陽県の県城にあり、正式には「北岳安天王聖帝廟」、略して「北岳真君廟」と言われています。北魏の宣武帝のときの創建で、北岳（山西省東北部の恒山）が祭られており、規模は広大で、南から北へ神門・御香亭・凌霄門・三山門・飛石殿・徳寧之殿などが並んでいます。中心に位置する「徳寧之殿」は琉璃瓦葺き・重檐四柱で、周囲の漢白玉石の手すり、その柱頭の獅子、窓の連子の磚彫は精巧で、いずれも元代のものです。

殿内には大きな壁画があり、東西両壁は高さ８メートル、幅 18 メートルの「天宮図」で、図中の人物の高さは３メートルに達します。西壁のもっとも高いところに描かれている飛天の神は、顔つきが凶暴、頬ひげともみあげが連なり、勇ましくて力強く、矛を携え、非凡な気迫を感じさせます。唐代の呉道子の直筆と伝えられていますが、実際には元代に唐代の技法を模して描いたものとも言われています。

≪参考≫**「五岳」**は中国道教の聖地である五つの山の総称で、五名山とも呼ばれています。陰陽五行説に基づき、木行＝東、火行＝南、土行＝中、金行＝西、水行＝北、の各方位に位置する次の五つの山が聖山とされています。

東岳泰山（山東省泰安市泰山区）、南岳衡山（湖南省衡陽市衡山県）、中岳嵩山（河南省鄭州市登封市）、西岳華山（陝西省渭南市華陰市）、北岳恒山（山西省大同市渾源県）

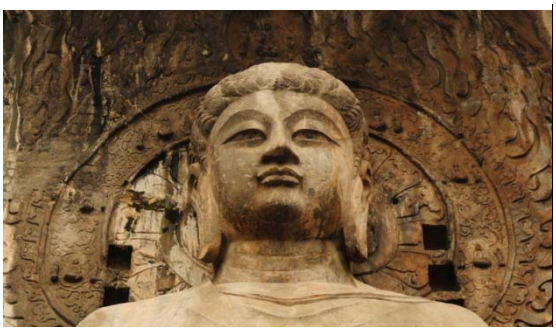
神話によりますと、万物の元となった盤古という神が死んだ時、その五体が五岳になったと言われています。この五岳を象徴図形にしたものが五岳真形図（「五嶽眞形圖」）です。

（フリー百科事典『ウィキペディア』より引用）

「響堂山石窟」【南北朝・河北省保定市曲陽県】

響堂山石窟は北斉時代に南響堂山と北響堂山に彫られた中国最大規模の石窟群で、1961年に重要文物保護単位に指定されました。邯鄲(かんたん)市郊外の峰峰鉱区にあります。南響堂山は西紙坊の鼓山の南麓、北響堂山は和村西方の鼓山の山腹にあり、15 キロほど離れていますが、ともに窟内の優美な石彫で知られており、洞内で袖を振ると銅鑼や太鼓のような音が響くといういわれがあります。北斉朝の政治の中心は鄴（現・河北省臨漳県）と晋陽(現・山西省太原市)でしたが、当地は両都の往来の途上に位置し、山紫水明であったことから、文宣帝・高洋が別荘を造営し、石窟を穿ち、寺を建てました。後に、隋・唐・宋・元・明代に拡張・改修され、南北あわせて石窟が 16、大小の仏像が 1400 体余りあり、幽玄で、配置もすぐれ、石像も造形がすぐれ、飛禽・走獣は活き活きとしています。付属の建物も規模が大きく、殿閣・亭楼が山肌沿いにひろがり、下から上へ層をなし、混然一体となっており、広大壮観で中国の建築・彫刻・書法・絵画の貴重な遺産となっています。

「龍門石窟」【北魏～隋、唐・河南省洛陽市】



「龍門石窟」は洛陽市の南郊外に位置し、辺りは伊水が南から北へと流れており、その東岸に香山、西岸に龍門山が対峙しています。遠望するとあたかも天然の門のように見え

ることから、古くから「伊闕」と呼ばれてきました。石窟は伊水の両岸に 1 キロメートルにわたって東西の岸壁に密集しています。甘粛省の敦煌莫高窟、山西省の大同雲崗石窟とともに中国三大石窟芸術の宝庫と並び称されています。北魏の孝文帝が平城（現在の山西省大同市）より洛陽に遷都（紀元 493 年）したころに開削が始まり、東魏、西魏、北斉、隋、唐、宋の諸王朝 400 余年の間、絶えることなく造像が続きました。両山に現存する窟龕の数は 2345、碑刻題記は 2800 余、仏塔 40 余、造像 10 万余尊あり、北魏窟は約 30%、唐代窟は約 60%を占め、その他の時代の窟龕の造像が約 10%となっています。北魏時代の代表洞窟は「賓陽中洞」「古陽洞」「蓮華洞」「魏字洞」「皇甫公洞」などで、賓陽中洞は北魏の宣武帝が父の孝文帝、母の文昭皇太后の功徳のために造営したものです。古陽洞は自然の溶洞を利用し拡大したもので、龍門石窟の中でも開削が最も早く、彫刻内容も豊富です。また、書法家に注目される北魏書法の代表作品である「龍門二十品」の内、十九品までがこの古陽洞にあります。龍門石窟の唐代の代表的な洞窟は、「奉先寺」「万仏洞」「潜溪寺」「看経寺」及び「万伍仏洞」など。特に「奉先寺」は規模最大で中国仏教芸術の最高峰を示す作品と言われています。

Ⅳ. 王墓・陵墓遺跡

「曹操高陵」【三国・河南省安陽市】

2009 年末、河南省政府で文化財の保護・管理を行う部署の省文物局は、安陽市安陽県安豊郷西高穴村の「曹操高陵」（曹魏高陵とも言う）を、三国時代に活躍した曹操（155－220 年）の墓と断定したと発表、世界中から注目されました。曹操の墓と伝えられている陵

墓はほかにも多くあり、安豊郷西高穴村の曹操高陵を「根拠のない伝承」と疑う声も少なくありません。河南省文物局側の説明によりますと、墓の規模や状況などが当時の記録と合致し、内部の壁画も後漢末から魏にかけての時代のものと判断できたとしています。

最も有力とされた証拠は、「魏武王」との文字が刻まれた石牌が発見されたことです。記録によりますと、曹操は「魏公」ついで「魏王」に封じられ、死後に贈られた諡号（しごう）は「武王」で、出土した石牌と一致します。曹操は後に「魏の武帝」と呼ばれるようになりましたが、曹操を「武帝」と称するようになったのは、子の曹丕が後漢の献帝からの禅譲により、皇帝に即位してからのことです。石牌にある「魏武王」は、むしろ曹操が死去した当時の史実に合致しています。

≪参考≫**■曹操高陵の基本的な配置が明らかに**　（2010 年 6 月 15 日・中国通信）

鄭州 12 日発新華社電によると、安陽西高穴曹操高陵陵園の配置が基本的に明らかになった。陵園は長方形で、墓の前には広場があり「前朝後寝（前側が政治を司る政務室に、後ろ側が皇帝の生活の場となる当時の宮殿の建築様式）」にのっとった配置となっていた。中国社会科学院の劉慶柱学部委員は曹操高陵を視察し、魏のころの年代が確定した墓、特に皇帝級の墓は出土例が極端に少なく、曹操高陵陵園の発見は、この時代の帝陵配置研究の空白を埋めるものだと述べた。おおまかに明らかになった陵園の形は長方形で、面積は 8934 平方メートル、北、南、東の３面には陵園を囲む壁が作られ、東側は壁の外側に堀が作られていた。北西部分には副葬墓が作られ、東側の壁と堀の間には祭祀儀式を行う広場が設けられていた。陵園には２基の大きな墓があり、２号墓が曹操の主墓で、１号墓は副葬墓だった。陵園の中軸線は２号墓と１号墓の中間にあり、東面の壁には２カ所の門があり、それぞれ２号墓と１号墓の墓道に通じていた。陵園の主陵門はまだ見つかっていない。残存する北壁基壇は長さ 100.81 メートル、幅 3.83～6.6 メートルで、南壁基壇は長さ 108.22 メートル、幅 3.27 メートル、東壁基壇は長さ 68.87 メートルで、壁の内側の面積は 5277.42 平方メートルだった。東壁には２カ所の陵門があり、曹操墓に通じる門は幅 2.95 メートル、副葬墓に通じる門は幅 1.23 メートルだった。これまでの発掘によると、陵園の配置は事前に計画されており、曹操が生前に住んでいた「前朝後寝」の宮殿建築配置を模倣したものだった。ただし陵園全体は想像していたほど大きくはなく、曹操の「薄葬」思想を実現したものとなっている。

（〆）